

目次

イランの絵本と児童文学 P.1-3

生命科学図書館サイエンスカフェ P.4-5

研修会「資料保存の基礎を学ぶ」P.6-9

生命科学図書館の相談サービスから
本が生まれました。P.10-12

図書室紹介・蛋白質研究所図書室 P.13

NEWS 図書館からのお知らせ P.14-15

利用者アンケート中間報告 P.16-19

本をつくる―「ショセキカ」プロジェクト P.20

イランの古都エスファハーン最古のモスク、マスジェデ・シャーメ（8世紀創建）。2012年ユネスコの世界文化遺産に登録。イランでは礼拝だけではなく、休息や昼寝をしにモスクを訪れる人も多い。

（撮影：番匠未来）



イランの絵本と児童文学

外国学図書館るくすT A
言語文化研究科 博士前期課程2年

番匠 未来

■るくす

平成24年4月、外国学図書館にオープンしたラーニング・コモンズの名称です。



ミニ講習会（外国学図書館るくすにて）

1月15日（火）に外国学図書館において「イラン絵本の読み聞かせ」というテーマで、絵本の読み聞かせとイラン児童文学についてのミニ講習会を行いました。

告知などを見て、「イラン？ 絵本？」と不思議に思われた方も多いかもかもしれませんね。ニュースなどでは政治・経済面で取り上げられることが多いイランですが、ペルシアと呼ばれた時代から長い歴史を持つ国であり、豊穡な文化背景を持っているのです。ちょっとイランについて知っている人なら、イランの文化といえばオマル・ハイヤームやハーフェズなどのペルシア語古典文学、世界的に評価の高いイラン映画などを思い浮かべてくださることでしょう。

例えば、ある二国間の政治・経済関係が良好な状態になくとも、文化交流を通した

関係を続けたり、相手国をより良く知りたくなったときに文化や風習の面から理解を図ることも可能であると考えています。

また、絵本についても、大人になってから真面目に読むことは少ないと思われるかもしれませんが、様々な角度から見ることで、絵本の中にも外国文化や他言語を学ぶ際のヒントや、新しい発見が隠れていることもあるのです。

ここではミニ講習会で読み聞かせをした絵本のお話、またイランの児童文学についてご紹介していきたいと思います。



どきどきねえさんどこいくの？

M・アーザード 再話 / モルテザー・ザーヘディ
絵 / 愛甲恵子 訳
スペースシャワーネットワーク 出版、2006年

M・アーザード

(1934-2006)

本名をマフムード=モシャッラフ・アーザード=テヘラーニーといい、イランの現代詩人であり文学評論家。著書に4冊の詩集と詩選集1冊がある。代表作は『出会いの園の花』。

モルテザー・ザーヘディ (1978-)

イラン北部の町ラシュト出身で、大学で絵画を専攻、現在は画家・イラストレーターとして活躍している。国内の様々な賞のほか、ポローニャ国際絵本原画展に4度入選している。

イランの 絵本紹介

アフマドのおるすばん



アフマドのおるすばん

フェレシュテ・ターイェルプール
文 / メフルヌーシュ・マアスー
ミヤーン 絵 / 愛甲恵子 訳
スペースシャワーネットワーク
出版、2006年



ごらん ごらん こうやって

カーンピーズ・カーカーヴァンド
文 / モルテザー・ザーヘディ
絵 / 愛甲恵子 訳
スペースシャワーネットワーク
出版、2006年

大人から子供へ 受け継がれるイランの昔話

今回読み聞かせとして選んだ絵本が『ごきぶりねえさんとこいくの?』というお話でした。

風呂屋の裏のくぼみに住んでいたごきぶりねえさんは、年老いた母親に言われるままハメダーンに住むラメザンおじさんのところへ旅に出ます。その道中いろんな動物たちがやってきて、一緒に働こうと誘うのですが、ごきぶりねえさんは彼らの誘いを断り旅を続けます。そして、40日歩いた末ハメダーンへと到着するも、ラメザンおじさんはインドに行ってしまう不在とのこと。すっかり落ち込んでしまったごきぶりねえさんは、そこで知り合ったネズミに誘われ一緒に暮らすことを決めたのでした。

このお話は『ごきぶりねえさん』という題で、イランで広く知られている昔話です。その起源はカージャール朝にまでさかのぼるとも言われていて、祖父母や親世代から子供へと伝え続けられているお話で、日本では言うところの『桃太郎』や『浦島太郎』のような存在です。本や絵本、舞台あるいはアニメやドラマの題材として、たびたび取り上げられています。

旅をする「ごきぶり」？

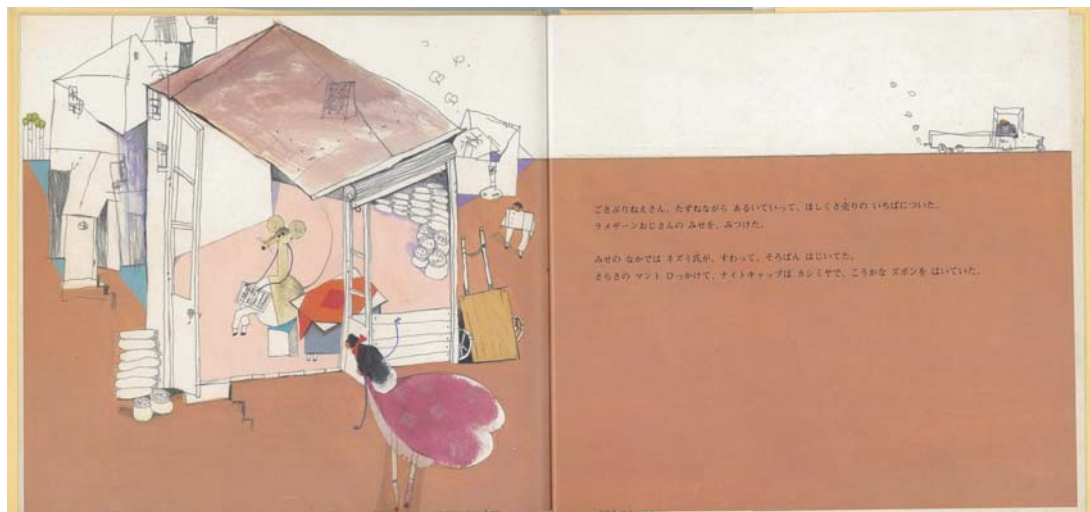
主人公がごきぶりだということに驚く方も多いと思います。日本では忌み嫌われるこの虫が絵本の中ではとてもかわいらしく描かれています。イランではごきぶりは嫌われ者ではないのか？ というと、そんなことはなく、イランでもごきぶりはやはり嫌われ者なのです。ではなぜごきぶりが主人公なのか、はっきりとした理由は分かり

ませんが、イランの女性はヘジャブ（髪や体の線を隠すための布）を身につけることが義務付けられており、その中でも黒く大きな布（あるいは大きな白地に花柄の模様の布）をチャドルと呼びます。少女たちが小さな体にその大きなチャドルを身につけ動き回る姿が、ごきぶりに似ているため、ごきぶりが主人公になったのではないかという説もあります。

少女が旅へと出る意味

イランでは昔から、お見合い結婚や親戚同士での結婚が多く、特に女性には結婚相手の選択肢が与えられていませんでした。今でこそ恋愛結婚が増えてはいますが、日本に比べ、お見合い結婚をする人はまだまだたくさんいます。この絵本の中でも、いろんな動物が登場し、一緒に働こうとごきぶりねえさんを誘いますが、これもある種の求婚の言葉でしょう。しかし、その誘いを断り、最後に誘いの言葉をかけたネズミ氏を選んだのは、まさにごきぶりねえさん自身の意思なのです。また、最初に「自分自身を磨いて旅に出なさい、運命の人が見つかるから」と諭した母の言葉も、男性社会のイランの中では珍しいはず。受身で待つばかりでなく、自分の信念を貫く少女。ここにこのお話の面白さがあると私は思います。ただかわいいだけでなく、相手に「もっとこういう風に言って」と注文をつけるごきぶりねえさんは逞しくもあり、読んでいるうちに応援したくなります。

ご存知の通りイランはイスラム教シーア派の国なので、この絵本を読むことで、イスラム教の結婚制度、あるいはイラン独自の婚姻儀礼などについて調べるきっかけにもなるかもしれませんね。





番匠 未来 (ばんしょう みくる)

大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程2年

2011年大阪大学外国語学部卒業。専門はペルシア語・ペルシア文学。

詩の国イラン

イランの人たちはみんな詩を愛していて、「イランは詩の国、イラン人は詩の民」だと自負しています。彼らの体には詩の韻律が刻み込まれていると言われるほどです。絵本にもそのリズムが反映されていたり、文章が完全に詩の形式になっているものもあります。残念ながら、私はこの『ごきぶりねえさんどこいくの?』の原文を知らないのですが、日本語に訳されたものを見ても、リズムを意識して訳されていることがわかります。口に出して読めば歌いだせそうに感じます。

様々なバリエーション、形で語り継がれる『ごきぶりねえさん』ですが、今回取り上げた絵本の再話⁽¹⁾をしたのが、現代詩人であるということにも注目して頂きたいと思います。イラン児童文学を語る上で、イラン現代詩人たちの存在を無視することはできないからです。

児童・青少年思想育成協会

児童・青少年思想育成協会 (كانون پرورش فكري کودکان و نوجوانان) は、イランにおいて児童図書館を運営したり、児童書を出版したり、その他児童・青少年のための文化・芸術活動を行う団体です。1965年、当時のイラン国王妃であったファッロフ・パフラヴィーにより非営利団体として設立されましたが、1979年のイラン革命⁽²⁾後は政府系企業として活動を続けています。

この協会が出来るまでは、イランには「児童文学」というジャンルは存在せず、子供には口承で物語が伝えられるのみでした。そこでこの協会が、児童・青少年文学執筆のため作家や新聞記者を広く招聘し、他国の協力も得て児童文学のジャンルを築いていきました。その協力者の中に、M・アーザード

のような現代詩人たちもいたのです。高い詩的才能・感覚を持った詩人が執筆・再話した物語が詩の影響を受けていることは想像にたやすいはずです。

児童・青少年思想育成協会の活動のおかげで、イランでは多くの絵本や児童書が出版され、映画やテレビ番組が作られ、図書館が運営されています。

また、近年ではモルテザー・ザーヘディのように国際展で賞を取るような才能あるイラストレーターも出てきています。現代イランのアート・アーティストたちをフォローする価値は十分にあるのではないのでしょうか。

絵本などの児童文学であっても、そこにはたくさんの疑問や発見が存在し、他国の文化を学ぶ際の鍵となります。子供が本を読んで学ぶことはごく単純で情報量は多くはありません。しかし、その単純さの中に大人が子供に教えようとしている人生の本質が隠されていることもあると思うのです。新たなイランの一面を、あるいは絵本が持つ魅力を知ってもらえれば幸いです。(終)

ミニ講習会参加者の感想

「絵本を通じてイランの文化・生活・価値観に触れることができて良かったです。番匠さんの話し方もとてもやさしくて、リズムも感じました。」

「外国の絵本に興味があったのでとても楽しかったです。設定は斬新なのに、内容は現実的で面白かったです。またこのような文化的な内容の講習会に参加してみたいです。」

「絵が幻想的で美しくて良かったです。ペルシア語の響きも聴いてみたいです。」

(アンケートより)

(1) 昔話・伝説等を現代的な表現で書きかえること。

(2) パフラヴィー王朝の独裁体制を倒し、イラン・イスラム共和国を樹立した革命。



岡村 康司（おかむら やすし）

大阪大学大学院医学系研究科教授/大学院生命機能研究科教授

【略歴】

東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。博士（医学）。東京大学医学部助手、ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校博士研究員、工業技術院生命工学工業技術研究所主任研究官、自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授などを経て、2008年4月より現職。

専門は生理学。これまでの主な研究テーマは、電位依存性イオンチャネルの構造と機能、神経分化過程でのイオンチャネル発現の制御、ホヤ幼生神経系の発生機構など。

生命科学図書館のホームページではサイエンスカフェ関連本リストや展示本リストを載せたパンフレットなどを掲載しております。こちらもぜひご覧ください！

附属図書館＞生命科学図書館＞生命科学図書館20周年企画

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/seimei/20th.php>

生命科学図書館サイエンスカフェ

この研究ができるまで ～研究の「誕生」と「成長」のプロセス～

生命科学図書館では20周年記念イベントとして、2012年11月18日（日）にサイエンスカフェを開催しました。ゲストに岡村康司教授（大阪大学大学院医学系研究科/生命機能研究科）、上川裕子特任研究員（大阪大学免疫学フロンティア研究センター）をお招きして、研究者がどのように研究を進めているのか、普段はなかなか見えないその裏側を伺いました。

当日は学生や研究者・一般の方まで幅広く、およそ30名の方にご来場いただき、ファシリテータの岩崎琢哉特任研究員（大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室、URA）の先導のもと、会場も交えて活発な議論が行われました。誌面の都合上、すべてはご紹介できないのですが、いくつかの話題を取り上げ、当日の様子をご紹介します。

情報収集のコツ

岩崎 日々増え続ける情報の中から、何かやりたい、何か調べたいという際に、情報が多すぎて探しづらいということがあります。先生たちなら何かコツをご存知なのかなと思うのですが、いかがでしょうか。

岡村 例えば、インターネット上の情報については正しくなかったり、考えが足りなかったりすることもある一方で、とてもよくできているものもある。一般的になってしましますが、溢れている情報に流されることなく、自分が本当は何をやりたいのかということを考えながら探すということが大事かと思います。

岩崎 やはり決定打はないのですね。ただ、新しい研究にとりかかるときには、「ここまではわかっている」というラインをはっきりする必要がありますよね？

岡村 具体例を言うと私の専門分野では論文の情報は2年前くらいの内容だと考えます。一番最先端の情報、現在進行中の研究、というのは学会発表から得られますね。

上川 私はずっと化学畑で来ましたが、「人間の体内で、人間が自分で治ろうとする力を助ける“材料”をつくりたい」という目標があって、生物分野の力をつけるために現在の研究室に入りました。このように異分野を取り込むにあたり、自分のこれまでの分野から遠ければ遠いほど、基礎知識が不足します。そういうときに、できるだけストレスなく、量より質の情報収集をしたい。岡村先生は最先端のお話をされましたが、こういう場面では私は少し古くても洗練された情報がいいなと思います。そういうときに役立つのが教科書。さらに教科書もたくさんあるので、現在師事している先生、この分野の専門家ですよね、にどの教科書がおススメか聞く。私なりの情報入手の近道です。

岡村 “自分のフィルター”がどういうものかということも重要だと思います。“フィルター”を狭めすぎると進歩がな

くなってしまいます。どこかで役に立つ可能性があるもので、何気ない情報をいつでも摂取できるような可能性をもっていることが大事。一方で何でもかんでも摂取していると深めることができないので。やはり、バランスが大切です。

収集した情報の評価

上川 論文を信じるか信じないか。自分が論文を書いていくと分かると思うのですが、論文の本文には、読み手へのプレゼンテーションの要素が多分に含まれています。そういう要素に惑わされずに本質（実験結果や中身）を一生懸命読み解く必要があります。自分の分野や近い分野なら、「データがしっかりしてるな」とか「たまたまうまく行っただけだな」とか感覚的にわかるのですが、そうでない分野については判断できず難しいです。

岩崎 自分の経験のあることについては書き手の立場に立てるからいろいろ分析・判断できるということですね。

岡村 まず、発表している研究者の立場からしても、どこか間違っているかもしれない、というのは常にあります。そして読み手としても、論文はどこかが間違っているかもしれない、100%は信じない、というのが研究者の本来の見方だと思います。これはどういう意味合いかというと、「科学が発展してきた」として、今まで確立してきたことでは説明できないことがあるから「発展」するわけです。ですので、まずは疑って、今までの科学では説明できないことがあるかと



前号に引き続き生命科学図書館20周年特集

うかということを確認するのが研究者の役割かなと思います。

岩崎 では、いきなりすごい論文が出てきても、「わー、そうなんだ、やられた！」なんて落ち込んでいる場合じゃないんですね(笑)

研究テーマの設定

来場者 研究の一番最初に「どういう問題を解くのか」という問題の発掘のプロセスがあると思います。この点について先生方はどのようになさってますか。また、注意していることなどあればそれも併せてお聞かせください。

上川 私は問題先行型と技術先行型の2つの方法があると思ってます。どちらもトライしたことがあります。前者は、大きな課題があって、それに対してどういうアプローチで研究していくかということから考えるもの。後者は自分が今持っている技術で可能なことで、まだ世の中に存在せず、かつ必要とされている

ものはないかと考えるものです。後者について最終的には自分が今一番関心の強いもの、ということに加えて、自分が一番楽しくなる研究、というのを判断基準にしています。ただこうやって思いつくことの半分以上はもう既に誰かにやられていますね。

来場者 自分の考えた問題とか課題が世の中に本当に役に立つのかというのはどのように判断していらっしゃるんですか。

岡村 最初から全部が確かに見通しが立っている研究なんてそんなになんないと思います。ノーベル賞を受賞した山中伸弥教授のiPS細胞の発見だって、誰もあんなことができるとは思ってなくて、コツコツやっているうちにああいう成果が出たということがあります。意外な展開が起きて新しいことが分かる、ということが多くてですね、そういう予想していなかったことが分かったときってわくわくします。それは研究活動全体の1%か2%のことなのですが、そういうことのために研究しているというのが実態かなと思います。

岩崎 研究者でない私たちは基本的に「反復」の中で新しさを見出せるかということをやっていますが、研究者は基本的に「まだ無いもの」に触ってるのですね。

取材：吹田地区図書館サービス課
藤江雄太郎、土出郁子

連続展示第2弾（11-12月） 中之島分館から生命科学図書館へ ～私の情報収集～

サイエンスカフェに合わせ開催した20周年記念企画展示では、カフェとは対照的に昔にスポットを当て、生命科学図書館の前身である中之島分館時代における研究と情報とのかかわり方をテーマとしてとりあげました。

展示の中心に据えた「私の情報収集」という『NAKATO NEWS』（中之島分館で発行していた図書館報）の連載では、いまにも通じる、ある意味でいまだからこそさらに有益な、情報とのかかわり方を読むことが出来ます。1975年のものですが、古いと感じるよりもむしろ、今よりも使える道具が少なかった分、考え方として新鮮に思えるのかもしれない。

例えばパンチカードという、分類がしやすいように工夫されたカードについての話が出てきます。それは今でいうところのタグと同じ機能（分類でき、後でソート可能な構造）を持っているのです

が、カードの四辺をパンチして（切り落として）“タグ”を付けていくために一度しか分類をすることができません。そのため情報の管理について入念に戦略を立てなければならなかったのです。

情報収集・整理だけでなく生産について書かれた梅棹忠夫の『知的生産の技術』（1969年、岩波書店）がいまだに売れ続けているのも、先人の情報との格闘から学べることが多いからではないでしょうか。

企画：吹田地区図書館サービス課
白石真之、荒木のりこ



上川 裕子（かみかわ ゆうこ）

大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任研究員

【略歴】

東京大学工学系研究科博士課程修了（化学生命工学）。博士（工学）。オランダ・アイントホフエン工科大学PD、日本ロレアル研究開発センターへア開発研究所研究員を経て、2012年4月より現職。

現在の専門は化学と生物学の融合分野であるケミカルバイオロジー。所属先の菊地和也研究室では、生体分子機能を解明するブロープ分子の開発を行っている。



【企画協力・運営協力】
大型教育研究プロジェクト
支援室

支援室は、大阪大学が全学的・重点的に推進する大型教育研究プロジェクトの、獲得支援・運営支援を目的に設置されている部署です。また、大型のプロジェクトに限らず、大阪大学の研究者がどんな研究をしているか、大学の外の人にわかりやすく伝えるという研究広報支援業務も担当されています。

今回のサイエンスカフェでは、企画段階から当日のファシリテーション・運営まで、支援室のお二人に多大なご協力を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

（写真上から、岩崎特任研究員、川人特任研究員）

資料保存の原則と実際について

講師 小島 浩之

理論と実際

今回の企画においては、大阪大学附属図書館の赤井さんが神戸大学の小村さんと私の間にたって、時間をかけて調整してくださった。赤井さんとの電話やメールによる一ヶ月ばかりのやりとりの中で重要な論点となったのは、資料保存の原則（理論）と実際（図書館の現場の実態）についてであった。そこで、十分な実践経験のある小村さんには大阪大学での実例を基に報告してもらい、私は理論的側面からの話に力点をおくこととした。

図書館界における状況を省みるに、実体験に基づく事例報告は、発表者と聴衆の間に共感関係が構築されるので好評を博することが多い。一方で、実体験の内容に現実感が伴えば伴うほど、逆に聴衆は一步引いて第三者的に面白がる傾向があることも否めない。結果、聞くだけで面白い（楽な）事例報告は、聴衆の頭の中を心地よく通り抜けるだけで蓄積として残りにくい。さらに、発表者も事例報告を元に一般化、抽象化した議論にまで持ち込むことは稀なので、事例は特殊例として記録されるにすぎなくなる。このように一瞬の満足感を得るための事例報告をいくら積み重ねたところで、発表者・聴衆の双方にとって真に意味あるものとはなりにくい。

筆者は、事実が一般論として定着するためには、具体から一般へ、具体から抽象へという帰納的な思考のベクトルと、逆に抽象から具体へ、一般から具体へという演繹的な思考のベクトル、この双方向からの作用による思考の移動（広がり）が必要であると考えている。しかし図書館の現場における帰納的な思考は中途半端であり、事例報告だけをいくら積み重ねても、それらを集積して一般化、抽象化しなければ一般論として普及させることはできない。また演繹的な思考は苦手のように見受けられる。この意味で今回は、赤井さん（司会）、小村さん（実際）と私（理論）で役割分担し、現場の実態と理論の両面から整理しつつ考えることで、聴講者とこの思考の移動（広がり）を実感したいと考えていた。

しかし、講演後のシンポジウムでの聴衆の反応は個別具体的な話題に集中し、さながら一問一答の様子を呈することとなった。また、研究者と現場の人間の考えること（つまり理論と実際）は乖離しているとい

う反応も目の当たりにした。筆者は歴史学および歴史資料の保存に関する研究者であると同時に、東京大学経済学部において資料保存の現場でマネジメントに携わっている。つまり立場としては、理論と実際の狭間に位置し、個人的には図書館の現場に近い人間のつもりでもある。その筆者からの話であっても、内容が理論的なものであれば、とたんに図書館の現場は不信感を抱くように感じられてならなかった。

理論は無用かそれとも理想か

「理論」と「実際」は先ほど述べた「一般・抽象」と「具体」の関係であって、決して相反するものでない。両者が共に備わって方法論として定着してゆくのである。しかし、図書館の現場では「所詮理論」、「理論はあまり役立たない」、「理論ではなく即効性のある具体例を」といった思いで満ちあふれている。これは医者に「何でもいから薬だけ出せ」と要求しているのと同じではないだろうか。もちろん即効性の薬でとにかく症状を緩和する対症療法は患者の生活の質を上げるため重要である。しかし同時に患者を苦しめる病魔を根本からたたき原因療法もまた必要不可欠なのである。原因療法のためには症例を蓄積し研究しなければならず、研究とは具体・一般・抽象の思考の繰り返しなのである。こう考えると、理論無用論は目先だけに囚われた危うい考え方だとわかるであろう。

また理論への不信感の根底には「理論は理想」との思い違いがあるようにも見受けられる。理論は具体（実際）を一般化・抽象化したものであって、決して理想ではない。誤解を恐れずに言えば、多くの実際を平均化したものが理論だと考えた方がよいだろう。事実、講演で採り上げた「保存・修復の原則」、「段階的保存プログラム」、「資料保存の原則」、「IPM」などの原理・原則は、全て多くの実例から構築された理論により裏付けられている。理論は理想像を描いたものではなく、実例を平均化して導きだされたものだと考えれば、幾分抵抗感がなくなるのではなかろうか。

なぜ理論は使えないと感じるのか

では、なぜ実際の現場では理論が使えない

附属図書館では、2012年12月6日（木）に「資料保存の基礎を学ぶ」と題し、学内構成員および図書館職員を対象とした研修会を実施しました。（参加35名）

本学では2008年以降、和古書・洋古書・漢籍・酸性紙劣化・マイクロフィルム・修復技術など、毎年テーマを変えながら、資料保存に関する研修会を開催してきましたが、今回は原点に立ち戻り、資料保存の原則をテーマに選びました。

資料の劣化・保存対策は、どこの図書館にとっても悩みの種です。しかし、他館の事例を単純に自館に適用しても、何の解決にもなりません。それぞれの図書館に固有の文脈からどのように保存計画の立案や保存対策の取り組みを行えばよいかを考えるには、理論的な枠組みの理解がどうしても必要となります。

そこで、理論と現場での取り組みとがどのように接点を有するのか、研究者による講演と図書館員による報告の両面から迫ってみたいと思います。



いと感じられてしまうのか。これは理論が実際の平均から導き出されたという性格がそのまま影響しているからである。例えばある地域に住む人間の平均をとることを考えてみよう。身長、体重、学歴、病歴、寿命、血液型など平均をとるべき要素が多くある。一方で、これらの平均がお互いに相関関係があるとは限らない。例えば、身長という要素の平均に基づいて作られた理論をもって、この地域の血液型の実態を説明することは不可能なのである。これを資料保存の理論に当てはめれば、洪水という大量の資料被害から導き出された「段階的保存プログラム」という理論をもって、少量の資料管理に関する方法論が見いだしにくいのは当然なのである。

また統計学の世界では平均とは一般値でないことは自明であり、中央値や最頻値を併せて考えないと実態把握がしづらいことはよく知られている。例えば体重80kgと40kgの二人、60kgと60kgの二人のグループで考えてみよう。体重の平均をとればどちらも60kgだが、60kgばかりにとらわれると両グループ間の内訳の差異が見過ごされてしまう。全体の平均が個々の実態に合致するということが自体が我々の思い込みなのである。ここから平均に基づいた理論を改めて実際に適用する場合には、そのままにならないことが容易に想起されるだろう。

理論はどのように扱えばよいのか

書誌学者として著名な長沢規矩也は古版本の鑑定について次のように述べている。

ある程度の鑑定眼が出来上がったら、まず直感によること。その後で理論付けをすべきである（『古書のはなし：書誌学入門』再訂第3刷、富山房、1977、p59）

理論は後付けするものと長沢が言うの

は、理論が実際に一般化、抽象化した平均値であり、金科玉条のごときものではないことを理解しているからであろう。

これを資料保存の現場に当てはめれば、資料をよく観察して何を優先して処置すべきかを考えることが最も重要であって、理論は考えた結果に使えるものを選択して当てはめればよいのである。ただし、長沢が「ある程度の鑑定眼が出来上がったら」と述べるように、これができるためにはまず資料に対する眼力を培う必要がある。資料の性格や来歴、材料など保存対象資料のあらゆる部分を子細に観察・調査し、把握できなければならない。また長沢は述べていないが、同時に理論を理論として基礎から勉強しておくのは当然であろう。なぜならば、自分自身が理解できていない理論を後付けで活用することなど不可能だからである。

むすびにかえて

「理論か現場の実際か」と二者択一を迫る議論は、「卵が先か鶏が先か」という議論と同じで因果性のジレンマに帰着するように思う。一方だけを肯定しても、また否定しても、残りの一方が成り立たなくなる。結局のところ、理論と実際は表裏一体であって、いずれも無視できないのである。

本稿では、理論と実際の問題について、主として図書館員に関する事項に紙幅を割いた。しかし、問題はそこだけにとどまらない。研究者の側には理論のみで現場を顧慮しない者もいる。現場の実際を無視した独りよがりの研究は、一瞬の満足を得るための事例報告よりたちが悪い。ほぼ実学である図書館情報学においては、研究者、図書館員の双方ともに、理論と実際の一方に偏ることなく、もっと「中庸」であることを心掛けるべきであろう。この点、自戒を込めてむすびにかえたい。（終）



小島 浩之（こじま ひろゆき）

1971年岐阜県高山市に生まれる。富山大学経済学部卒業。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。2000年11月から東京大学大学院経済学研究科助手、現在は同講師・経済学部資料室長代理。専門は東洋史学および歴史資料の保存に関する研究。

大学院在学中に京都大学附属図書館でアルバイトをしたことで、図書館の世界と関わることとなり、同時に書誌学や古文書学に興味をもつようになった。その結果、資料は字面だけでなく、モノとしての側面に着目して考えなければいけないことに気付く。資料そのものには人間の活動の様々な痕跡が残されているが、その痕跡を読み取って社会を再構成するのが歴史学、その痕跡を残すのが資料保存だと考え、これをもって二足の草鞋を履くことについて自己正当化している。資料保存に関する主要業績は参考文献を参照のこと。

参考文献

- ①吉川也志保・小島浩之・佐野千絵 2007「大学における学術資料の保管状況とその問題点：東京大学経済学部図書館の事例一」『保存科学』46
- ②小島浩之 2008「大学図書館における資料保存：戦略的資料保存試論」『図書館雑誌』102(2)
- ③小島浩之 2009「総説：マイクロフィルムの保存と状態調査」『マイクロフィルム状態調査報告書』東京大学経済学部資料室編集、東京大学経済学部図書館
- ④小島浩之 2009「学術資料の調査と計画：東京大学経済学部図書館の事例」『資料保存の調査と計画』日本図書館協会
- ⑤小島浩之 2010「デジタル情報の劣化と陳腐化・化石化」『漢字文献情報処理研究』
- ⑥小島浩之 2010「資料保存の考え方：現状と課題」『情報の科学と技術』60(2)
- ⑦小島浩之 2010「代替保存における意思決定プロセス：大学図書館の事例」『資料保存のための代替』日本図書館協会
- ⑧小島浩之 2011「東京大学経済学部資料室と資料保存」『PASSION』32
- ⑨小島浩之 2012「資料を保存するとはどういうことか」『Better Storage』187

（おこわり）

今回の小島氏の講演内容は、氏が過去に行った講演や発表した論文に基づくものでしたので、編集担当より、講演内容の忠実な再現ではなく、講演当日に伝えきれなかったことを中心に新たに稿を起こしていただきました。

実務の中で行う、資料保存体制づくりの試み

小村 愛美

はじめに

図書館には、膨大な量の図書・雑誌などの資料があります。電子ジャーナルや電子書籍、データベースなど電子的な資料も大きな割合を占めますが、過去から蓄積してきた紙資料の存在もいまだに大きいものです。学習や研究への利用も、人文科学をはじめとする複数の分野ではいまだ主流を占めています。

図書館にとって、これらの紙資料は購入すれば終わりではなく、長年の利用を保証するために保存されなければなりません。図書館において資料を保存するということは、使命のすべてではありませんが、重要なもののひとつであるのは間違いないことです。本研修会では、2009年～2012年までの3年間、私が大阪大学総合図書館での勤務の中で資料保存のために試みたことを整理し、報告いたしました。

1. 一般資料の破損

◇そもそもの状況ときっかけ

所属する図書館で資料を長く利用できるようにするため、保存の対策をきちんと実施したい、そのための知識が欲しい、研修を受けたい、というのは多くの図書館員の皆さんが抱いたことのある思いではないでしょうか。そしてその思いは、日々カウンターなどで目にする破損した図書を、「何とかしたい」という気持ちがきっかけになっていないでしょうか。

総合図書館のカウンターでは年間300冊ほどの破損図書（2011年度）が確認されていました。私が資料保存に関心を持ちはじめたのは、それらの図書を何とかしたい、補修のテクニックを身につけたい、という思いが発端でした。

◇まず試みたこと

補修の方法に関する文献を読んだり、資料保存関連の講演や研修に参加したり、参加できなかった時は出席した同僚から資料をもらうなど、まずは補修の知識と技術を身につけていきました。そして破損パターン別に簡単な補修のマニュアルを作成して、手当てできる破損図書はとにかくすべて手当てしようと、取り組みを始めました。

◇行き詰まり

しかし、その取り組みはすぐに行き詰

まってしまうました。他の日常業務もある中で、補修に割ける時間は限界があります。また1人で行っていたために、割ける労力も限られていました。そんな状態で破損図書すべてに手当てをしようとしても、作業量が全く追いつきません。こうして日々カウンターで見つかる破損図書がどんどん溜まっていき、補修作業の効率化と、どのような破損にどの程度まで手間をかけるのかという基準の必要を痛感することになりました。

◇仲間を増やす

まず自分1人で補修に取り組んでいた状況を変えたいと思い、基礎的な知識と技術を課内で共有することを始めました。時間を見つけて課内でミニワークショップを開き、「紙の目」の話や補修の基礎テクニックなどを実際に手を動かしながら説明しました。幸いに関心を示してくれる同僚が数名いて、その後も補修作業に協力してくれるようになりました。

さらに、書庫内の破損資料に対処していた目録係とも連携を取ることができ、補修に必要な材料やテクニックの共有を始めました。

◇体制づくりの一步

こうして補修に関わる人手の面が改善できたところで、次のステップとして、補修だけでなく「資料を保存する」ということ全体に対する基本的な考え方を共有することや、また異動によって担当者が変わっても長期的に対応できるような資料保存の体制をつくる必要が生まれてきました。

その第一歩として、「資料保存のガイドライン」と「破損資料仕分けシート」の2つのツールを作成しました。ガイドラインは、資料が傷む要因・傷みを予防する対策と傷んだ後の対策・資料保存に関する基本文献や研修の紹介、を骨子としました。さらに資料を置く環境を管理することの重要性、総合図書館の保存環境の現状と今後についての簡単な提言も盛りこみました。

「破損資料仕分けシート」は、主にカウンターで確認された破損図書に対して、どのような対処を採るのか基準を定めたツールです。破損の程度や資料の所蔵数、利用頻度などによって、複本を新しく購入・修理製本・現状維持・補修の手当て、といった対処をフローチャート式に選択するようになっています。対処の決定を助けるよ



シバンムシの幼虫

シバンムシによる食害の痕
（貼付した図書館のラベルが
食い破られている）

カビ害の発生した書庫の資料

う、判断の目安や対処方法それぞれのメリット・デメリットの説明も追加しました。

2. 環境管理

1.で述べたように、利用が多い一般図書の、破損した後の対処については体制の土台ができました。少しずつ体制が回りはじめたところで、より貴重な資料も含めた図書館全体の環境を考える必要も出てきました。

◇新たな劣化

2011年6月、貴重図書室の一部と書庫の一部に紙を食害するシバンムシという害虫が発生しました。すぐに対処法検討のため、害虫用の粘着シート式トラップを使って被害範囲の調査を行いました。また新たに部局から図書館へ移される予定の古典籍資料に対しても、あわせて事前調査を行いました。さらに10月、別の書庫資料の一部にカビ害が発生し、こちらに対しても被害範囲の調査をまず行いました。

◇応急対処

調査の結果、当初発見された資料群以外に害虫の被害はなかったため、応急対処として、該当資料と移管予定の古典籍に薬剤燻蒸を施しました。さらにそれらの資料を置いていた貴重図書室、書庫に殺虫剤を散布しました。

カビ害への応急対処としては、消毒用クロスでカビを拭き取り除去する作業を行いました。これでいったん被害の進行と拡大は収まりましたが、それだけでは再発の可能性があり、害虫やカビの発生を予防する対策の実施が必要でした。

◇中長期的対処

予防対策として害虫やカビの発生条件を取り除くため、資料の環境管理を行い、予算や人員の範囲で実現可能な管理体制をつくることに着手しました。害虫やカビの発生条件は、侵入経路や発生の温床となる埃などさまざまですが、最も大きな条件が温度と湿度です。どちらも高温多湿になるほど発生しやすく、一方で紙資料に適しているのは温度20～25℃、湿度45～55%程度の環境です。この範囲内であれば被害が起ることも少なく、紙資料を長く保存することができます。

貴重図書室は従来から24時間空調を運転していましたが、書庫では空調管理は行っていませんでした。貴重図書室の空調管理は適切なのか、書庫ではどのような環境のもとに害虫やカビが発生したのか、まずは現状把握につとめることにしました。3つの貴重図書室、書庫で被害の発生した

フロア、加えて空調管理を行っているマイクロフィルム資料室に温湿度計を設置し、1日2回の計測を開始しました。

温湿度の管理にまず着手したのは以下の理由によります。害虫やカビの他、紙の酸性劣化、マイクロフィルムの劣化等、複数の資料劣化に大きく関わる要因であること、そして資料環境の現状把握にかかるコストと労力が小さいこと。つまり資料保存の環境管理に対する費用対効果が非常に高いためでした。その他、今後必要な環境管理の方策として、定期的な清掃の徹底、年1回程度の害虫点検、資料の劣化予防に効果的な設備の整備等、優先順位をつけて「資料保存のガイドライン」に記載しました。

また、もしも再び害虫やカビ被害が起こった時のため、図書館内でできる殺虫法を課内で共有し、カビ害の発生条件や対処の記録も残しました。

まとめ

以上、3年間に模索しながら実施した内容を述べました。しかしながら、まだ資料保存の体制として不十分な点も残っています。資料のより良い保存環境のためには、図書館資料全体の状態調査、長期的な保存計画の策定など、実施すべきことが多々あります。

また3年間に実施した内容には、資料保存関連の文献に書かれている原則よりも、総合図書館固有の事情に依った部分が多くあります。原則どおりの環境が実現できれば理想的であるのは事実ですが、さまざまな事例から導き出された一般論である原則が、総合図書館の事情と一致しない部分があることもまた事実です。ですから、資料保存は原則と、図書館固有の事情の双方を踏まえた上で実践するものだと考えています。

現場で目にする資料を「何とかしたい」と考えて資料保存の文献を手にとると、そこに書かれている原則は抽象的でわかりにくいと感じるかもしれません。しかし原則は、実践の裏づけとなるものです。原則を学び、個別の事情を加味して実践し、その判断の拠りどころとしてまた原則に立ち戻る、その往復が必要であると思います。

この報告事例の害虫やカビのように資料の劣化が発生したとき、普段はできない保存環境の改善を図るチャンスでもあります。応急的な対症療法だけで終わらせず、まず現状を把握し、どこまでならよりよい環境に近づけられるか、そして中長期的にはどのような展望を持つか、考えて実行していくことが必要です。（終）



小村 愛美（こむら いつみ）

1986年大阪府生まれ。同志社大学文学部卒業。日本古代史専攻。2009年4月大阪大学附属図書館に採用、総合図書館にて利用者サービスと蔵書の管理を担当。担当業務の影響もあり、資料保存に関心を持つようになる。もともと本は好きであったが、中身の活字だけでなく「本」という構造物自体も好きであることを悟る。まず本の補修にハマっていたが、やがて本を置く環境管理へ、そしていわゆる「貴重資料」のみならず一般書も含めた図書館の資料全体を、いかにコストパフォーマンス高く保存するかへと関心が広がる。2012年4月より、神戸大学附属図書館電子図書館係にて勤務、デジタルアーカイブと学術成果リポジトリを担当。新たに学術情報のオープンアクセス、学習支援、大学のFD・SD等々、関心の対象が見境なく広がっているものの、何かと機会を見つけては資料保存にも関わっている。

生命科学図書館の相談サービスから 本が生まれました。

附属図書館吹田地区図書館サービス課の諏訪敏幸専門職員(参考調査を担当)の著書『看護研究者・医療研究者のための系統的文献検索概説』が1月に上梓されました。

今日、無料の検索エンジンや大学で契約しているデータベースにより、「キーワードを入力して実行をクリック」という形で簡単に学術文献の情報も探せるようになりました。この本では、場面に応じてそういった使い方の有用性も認めつつ、より水準の高い研究を行うためにはきちんとした方法論による「系統的検索」が不可欠だと述べています。また、文献とは何かという基本から、「系統的検索」の考え方と実践までが丁寧に解説されています。

今回、著書の内容や、この本ができる背景となった生命科学図書館参考カウンターでの長年の経験について、諏訪専門職員へのインタビューをもとに紹介します。



諏訪敏幸著

『看護研究者・医療研究者のための
系統的文献検索概説』
近畿病院図書館協議会、2013年
ISBN 978-4-9903284-1-2

著者紹介

諏訪敏幸
(すわ としゆき)

1952年4月生まれ。小学生から図書館員をめざし、中学入学と同時に基礎トレーニングを始めた。1973年3月に図書館短期大学文献情報学科を卒業し、同年4月より大阪大学附属図書館に勤務。2004年3月放送大学大学院文化科学研究科修了。附属図書館のコンピュータ・システム部門、雑誌管理・雑誌目録担当を経て、1998年4月より現在まで生命科学図書館にて参考調査業務を担当。

最初に、この本を書かれた動機や意図を教えてください。

まず近年の大きな変化として無料の検索エンジンの登場があります。この登場により、「ぱっと情報をつかむ」ということに関しては飛躍的に向上しました。しかし、そのことが研究能力にとってマイナス要因となる一面もあるように思います。いちいち文献に頼るまでもなく十分な知識を備え、また研究者間のネットワークが活用できることは、研究者としてのいわば基本です。しかしそれだけでなく、必要に応じて自らきちんと文献の調査・収集ができなければなりません。

とくに看護の分野はここ20年くらいで急速に発展してきた研究分野で、文献検索の技術が確立していません。社会科学の側面も大きいので、医学と比べても文献検索の壁にぶつかりやすいです。

長年、学生や研究者にカウンターや授業で文献検索の手法を伝えてきましたが、その際に「あとでこの本を参考にするといいですよ」と紹介できるような概説書が見つかりませんでした。ならば、自分で書こうと考えて今回の本の執筆となりました。

そのような動機で書かれた本書ですが、どういう人たちに読んでもらいたいですか。

主な読者として意図しているのは、看護・保健・助産・リハビリテーション・介護などの領域で研究をしている方たちです。医学・歯学・社会医学・生理学・放射線・検査・薬理・栄養・臨床心理・代替医療などの領域でもこの本で述べていることは概ねあてはまります。

基本的な記述の水準は大学院生・若手研究者向けです。ただ、学部生・専門学校生・現職看護師のための初歩的なトピックスを、また、教員や上級の看護師・図書館員向けの細かい問題も付け加えていますので、幅広く読んでいただけたらと思います。

本書のメインテーマとなっている「系統的検索」について解説をお願いします。

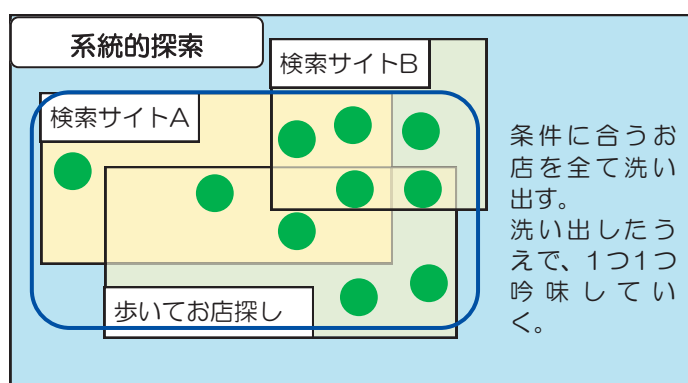
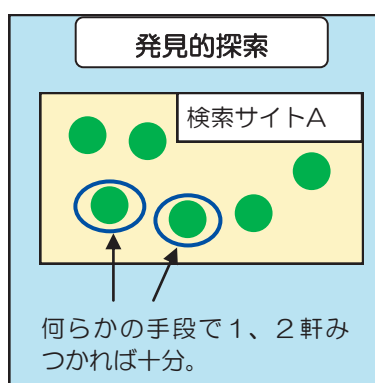
情報探索には2つの種類があります。私はこれを「発見的探索」および「系統的探索」と呼んでいます。

前者の発見的探索は、目的に合う情報が1つまたはごく少数得られればそれでよいというものです。検索エンジンによるキーワード検索など、日常のちょっとした情報

発見的探索と系統的探索の違い

A駅から徒歩10分圏内のイタリアンレストランを探す、という例でみてみます。

● が条件に合うお店、○ が探索結果として入手するお店です。



検索の大半はこれですね。

一方で、後者の系統的探索は、条件に合致するもの（可能な限り）全てを探索結果として得るというものです。合致するもの全てを得るのが目標なので、適切な検索式・検索語を試行錯誤することや、検索結果からの手作業での選別（スクリーニング）も系統的探索においては不可欠なプロセスです。

系統的探索は系統的方法に依拠する必要があります。系統的とはすじみちに則っているということです。どのようにすればすじみちに則った検索ができるのかが問題で、そのためには以下の3条件が満たされなければならないと、私は考えました。

- ①全体性……全体を偏りなく検索し、必要なものを網羅的に取り出すこと。
- ②合理性……検索行為が客観的なものであり、同じ検索対象に対して同じ検索行為を行った時に結果が同じであること。
- ③外部性……検索者の意志に従って検索でき、検索方法が説明可能であること。⁽¹⁾

ここからは、本が生まれる背景となった、生命科学図書館参考カウンターでのレファレンスサービスについて伺います。

まず、利用者の方と接する際のポイントをお聞かせください。

私は参考調査、いわゆるレファレンスには2つの技術的柱があると考えています。1つは資料の知識です。主題的なことなく、図書と雑誌はどう違うのか、電子ジャーナルにどうアクセスするかから始まって、文献の見方・扱い方にまで至る資料そのものの知識です。これは図書館員のまさに強みで、自信をもって提供できるものです。

もう1つはインタビューの力です。利用者の質問内容を表面的な言葉だけで受け取るのではなく、実際にどういうことを知りたいのか、会話の中からつかんでいきます。相手の立場・考え方に立って、共感するということが大事です。本人が気づいている情報要求（ウォンツ）だけでなく、気づいていないけれど必要な情報（ニーズ）をうまく汲み取って提供することが必要です。

それと何か説明する際には、「こう決まっていますから」と押しつけのように伝えるのではなく、なぜそうなのか、ということをしちゃんと伝えるということも心がけていますね。

当初配属時からこの15年間で、利用者の方や参考調査の内容など、時代による変遷はありましたか。

技術的・社会的変化はもちろんありましたが、参考調査の根幹は10年やそこらで

は変化はないですね。英米では1990年代後半からウェブ・レファレンス⁽²⁾への移行論やレファレンス・デスク不要論が盛んになりました。しかし生命科学図書館ではそうした中でもレファレンス・デスク（参考カウンター）での相談件数がむしろ増え続け、近年は1件1～2時間の相談を年に1,000件近く受け付けている状況です。この本もそうした背景の下で書かれました。

私がこの担当になってから、受動的ではなく、積極的な参考調査を行うようになりました。最初はこちらから声掛けをして話を聞いてといういくつかの「点」であったのが、徐々に先輩からや同回生内での口コミや、先生からのアドバイスなど「面（仲間内）」に広がってきて、利用者の方からどんどんカウンターに来てくださるようになった。「図書館に行けばどうにかなるよ」と。これは図書館としてとてもありがたいことです。多くの方々と接することでこちらも経験を積み、よりよいサービスを提供できるようになるし、また、みなさんとより近い存在になることで、研究の段階に応じた適切なサポートも可能になります。

研究のサポートというお話がありました。研究分野の専門家ではない図書館員が、利用者の方のために貢献できることは何でしょうか。

まずは、文献や資料自体の知識、これは先ほども述べたとおりです。もう一つ、もちろん専門分野については学生・利用者の方が強いわけですが、「他者」としての視点を与えられることが図書館員の強みではないかと私は考えています。研究者・学生の情報交換はどうしても同じ分野の研究者コミュニティ内や、同じ学科・同じゼミの学生間のものとなりがちです。これに対し図書館員の知識は「広く浅く」で、それを背景にさまざまな視点からのアドバイスを提供できます。遠慮せずに、伝えるべきことを伝えていくことの大切さを強く感じています。

それでは最後に、読者のみなさまへ一言お願いいたします。

永年にわたるみなさまのご利用に感謝します。私は2013年3月末で退職、この本はいわば書き置きです。みなさまに引き続き図書館をご利用いただきますよう、またこの本が多くの方々のお役に立つことを、願っております。

取材：吹田地区図書館サービス課
藤江雄太郎、荒木のりこ

「系統的である」 ということ

そもそも系統的であることは学問の基本で、学問は系統的でなければ価値がありません。しかしどういうわけか、こと文献検索になるとそういう考え方がなくなってしまう研究者も多いようです。

系統的であることは、研究者にとってそうであるのと同様、図書館員の考え方の基本でもあり、本書が紹介する検索方法の一部を検索テクニックとして解説するものも以前からありました。しかしこれに「系統的検索」という用語を用いたのは知る限り私が最初です。系統的検索全体を方法論的に見渡すような概念的整理を試みた文献も他に見当たりません。この本で紹介している方法論は既存研究の発展というより、私自身の経験と理論的総括によるもので、まだまだ内容が成熟していない部分も多いと思います。ぜひ読者の皆さんに批判的に読み解いていただいて、この方法論を洗練したものにしていってほしいと思っています。（諏訪）

(1) これは当たり前のように思えますが、例えばデータベース検索システムで検索語を入れて検索する際に、その検索語が検索システムにどのように解釈されているか、どのように検索プロセスが進んでいるかということが見える必要があるということです。

(2) メールや入力フォーム、チャットなどを用いてのオンラインでの参考調査のこと。

生命科学図書館の相談サービスから本が生まれました。

生命科学図書館参考カウンターで諏訪専門職員とともに働いた二人の職員に、今回の本の内容やカウンターでの経験から、今後の相談サービスについて考えることを聞きました。

取材を終えて

今回の取材を通して、日ごろ聞けない深いところまでお話しができました。

諏訪専門職員の幼い頃からの意欲・情熱に感銘を受けて、私たちもさまざまな利用者の方とお話して、自身の足りないところを日々勉強しながら、よりよいサービスに努めようと決意を新たにしました。

これからも生命科学図書館はみなさまをサポートできるよう邁進いたします。今後も生命科学図書館をよろしくお願いいたします。

生命科学系の文献検索等、お困りの事がありましたら以下のご連絡先までどうぞ！

■図書館資料の貸出・複写、その他図書館利用全般について
<メインカウンター>
✉ ls-desk@library.osaka-u.ac.jp

■文献検索やデータベースの使い方など、研究・学習に必要な文献や情報に関することについて
<参考カウンター>
✉ ls-ref@library.osaka-u.ac.jp

参考カウンターの日々

2009年から3年間、生命科学図書館の参考カウンターに勤務していましたが、初めのうちはレファレンスサービスの重要性をあまり理解できていませんでした。オンラインデータベースや電子ジャーナルが普及し、特に理系分野については図書館に来なくてもほとんどの情報が入手できる時代に、わざわざ来館してまで相談する人がどれくらいいるのだろうと思っていました。

ところが実際には、次から次へと現れる、学部生から院生、教員にまでわたる相談者の数に圧倒されました。しかもどの方も、30分から数時間も自分の研究課題について話し込んでいくのです。諏訪さんは相談者の話を聞き、データベースを操作しながらどんどんテーマに沿った先行研究やデータを検索しておられました。

データベースや電子ジャーナルのインターフェースはどれも直感的に操作できるようにデザインされていて、とりあえず検索窓に言葉を入れればそれらしい結

果がヒットして、検索できたと感じさせてくれます。しかし、学術研究のために十分な検索をしようとすれば、やはりそれぞれのデータベースの検索システムの仕組みやそこから発生する特徴、くせなどをわかっていなければなりません。検索に慣れてくるほどそういった知識が必要になり、相談にくる方が多いということがだんだんと私にもわかってきました。それからは少しでも信頼できる相談相手にならなくてはと思いながらも、医学の素養が全くない私には、そもそも皆さんの相談内容を理解するのも大変で、気ばかり焦る3年間であったように思います。

今回出版された本は諏訪さんのこれまでのお仕事集大成といえる1冊で、直感的な検索から一歩進んで、学術研究のための検索法を学びたい方のニーズに応えるものだと思います。私も、今後カウンターでそのようなニーズに応えられる存在になれるよう、たゆまず努力しなくては思っております。

吹田地区図書館サービス課 山本侑子

生命科学図書館のカルチャー

2月下旬のラグビーの日本選手権でサントリーが3連覇を達成しました。就任1年目の大久保監督は再三「強いサントリーのカルチャー、だれが指導者になってもぶれないクラブカルチャーを築きあげたい」ということを語っていました。

この言葉が私の印象に残ったのは、おそらく2点理由があるように思います。一つは大学のカルチャーと図書館との関わりです。図書館は知的インフラだとよく言われますが、資料やデータベースなどの研究のインフラを通して学問のカルチャーが受け継がれていくと同時に、その場で行われる活動や交流からその場のカルチャーが築かれていく、そんなふうに思っているのです。

もう一点は今年度で諏訪さんが定年退職され、生命科学図書館にも変化が起きるためです。私は昨年4月から諏訪さんの隣で利用者の方々とのやり取りを見させていただいて、知識の豊富さと的確な対応に単純に驚嘆しつつ勉強させてい

ただいてきました。そのやり取りが本書を読んでいるとたびたび思い起こされるという意味では、本書は諏訪さんが長年培ってきた生命科学図書館のカルチャーを伝える本ともいえるのかもしれません。

残される者としてはそのカルチャーを次につなげられるかが課題となります。以前諏訪さんに「役職や役割に能力や技術がついていくのではなくそれを行う“人”につくものだ」ということを言われたことがあります。それは今ではその場のカルチャーが腑に落ちていなければそこから能力や技術を得ることはできない、という意味でもあるのだと感じています。生命科学図書館にぶれないカルチャーが根付くかどうかは今後に期待していただくとして、私としては、この本、この土壌をもとにみなさんとともに生命科学図書館のカルチャーを耕し、大阪大学のカルチャーを支える力になり続けられればと思っています。

吹田地区図書館サービス課 白石真之

図書室・資料室めぐり

蛋白質研究所図書室

利用者に優しい図書室を
心がけています。

蛋白質研究所は、吹田キャンパスの西端にある共同利用研究施設で、日本における蛋白質研究に重要な役割を果たしています。

蛋白質研究所図書室は蛋白質研究所2階の一番東側にあり、どなたでも利用できる図書室です。所在・名称の通り蛋白質や生化学に関する図書・雑誌が充実しており、自然科学系の研究をしている方は一度足を運んでみる価値があります。

なお、入室の際には学生証や図書館利用者票ではなく、蛋白質研究所が発行している所員証もしくは入室カード（研究所2階西側の庶務係で貸出）が必要です。また、所員は24時間365日入室することができます。



カウンター

貸出・返却、文献取寄の依頼ができるほか、カウンター横の端末で蔵書検索もできます。気さくな職員がいろいろな相談に対応いたしますので、お気軽にお声掛けください。

書架（図書・製本雑誌）

蛋白質をはじめとする生化学の本はもちろん生物学や実験方法に関する資料もあります。よく利用されている図書は『イラストレイテッドハーパー・生化学』等の一般的な生化学の資料です。



大型プリンター

所員のみ利用できるプリンターです。学会前にはポスターを印刷する人が押し寄せます。所員であれば24時間利用できますが、使い方に癖があるので、事前に使い方を聞くか、使い方を知っている人と来るのがお勧めです。

閲覧席

職員のお勧めは入口から入ってすぐにあるソファ席です。くつろげる空間になっておりますので、こちらで実験の疲れを癒してはいかがでしょうか。

ソファ席以外の閲覧席も1人分のスペースがゆったりとしているので、雑誌や図書と一緒にノートパソコンを用いて集中して学習することができます。

書架（未製本雑誌）

未製本雑誌は東側奥にある書架に置いてあります。『実験医学』等の実験に関する雑誌に人気があります。所員の方は実験の合間を縫って、これらの雑誌の必要な個所を見られます。また一部の雑誌は電子ジャーナルも利用できますのでぜひご活用ください。

【注意事項】
蛋白質研究所所員以外の利用は、

- ①平日（月～金）の10:15～17:15です。
- ②職員が不在の場合は閲覧以外の利用ができません。

図書室の利用を希望される場合は、事前に下記連絡先へお問い合わせください。

☎06-6877-5111
（大阪大学代表）
（内線：9210）

NEWS☆図書館からのお知らせ



図書館TA講習会 拡大中〔総合図、理工学図、外国学図〕

◆2012年11月から2013年1月にかけて、総合図書館、理工学図書館、外国学図書館において、図書館ティーチング・アシスタント(TA)講習会を開催しました。外国学図書館では「るくす」の開設後、初めての開催です。◆今年度はMicrosoft Wordの使い方やプレゼンなど一般的なアカデミックスキルからやや専門的な内容も。進路に悩む方向けに研究室の選び方といった内容も盛り込みました。◆後期は合計28回開催し、参加者は105名。授業と重なって参加できなかった方も多いようなので、今後は回数を増やすなど皆さんの学習のお手伝いができるよう充実させていきます。



初めての中国語（1/15、1/22）〔総合図〕

◆2012年11月にオープンした総合図書館グローバル・commonsにて、中国からの留学生ティーチング・アシスタント(TA)による「初めての中国語」を開催しました。◆今回は「第一弾 発音にチャレンジしてみよう!」「第二弾 簡単に話せるには?」というテーマで、2回に分けて実施。中国語や中国の文化に関心のある学生、計16名が参加してくださいました。◆ネイティブスピーカーによる指導ということで、参加者も大満足。今後も、TAによる語学や異文化紹介などの各種イベントを開催していく予定です。



プレゼン入門“話す”基本技術 ミニ講習会(全2回)〔総合図、理工学図〕

◆標記の講習会を2013年2月半ばから3月上旬にかけて、総合図書館グローバル・commons、及び理工学図書館グループ学習室で開催しました。昨年2月と9月に続けての開催となり、今回は初めて吹田地区の理工学図書館でも開催しました。◆附属図書館の久保山専門職員が企画及び講師を担当し、全学教育推進機構の堀一成准教授、坂尻彰宏准教授にご協力いただきました。◆「自分の考えを、自分の言葉で」アウトプットできること、ロジカルに話ができることをテーマに、「型」を使った話し方、声やアイコンタクトの使い方のコツについて、実習をまじえて学びました。1年生から修士1年生まで幅広い学年から参加いただきました。約50名を超える申し込みがありましたので、今後は定期開催を含め検討していきたいと、考えています。



はじめての論文—知ろう・探そう・手に入れよう!〔総合図〕 学術論文検索ミニ講習会〔総合図〕

◆学部生の方にもレポート作成で学術論文を上手に活用してもらおうと、総合図書館では、論文検索講習会「はじめての論文」、学術論文検索ミニ講習会をそれぞれ6月、7月から、毎月開催してきました。◆昨年度は年2回だけの開催でしたが、大変好評であったため、随時参加いただけるように今年度からは定期的に開催しています。2月までに合わせて71名の方に受講いただいています。◆今後もラーニング・commonsで講習会を開催していきますので、気軽に参加してください。



論文の書き方・文献の読み方プチ・ゼミナール（全4回）〔総合図〕

◆2012年12月から翌年1月にかけて、プチゼミ（全4回）を開催。今年で3年目です。「補講」を含め、のべ28名の方が参加されました。講師は、堀一成准教授（全学教育推進機構）と赤井専門職員（附属図書館）が担当しました。◆パラグラフの考え方や、読む際のスキミングについてなど、受講者にも役立った様子でした。◆次年度は卒論の準備期間である10～11月頃に開催したいと考えています。

附属図書館Webサイトリニューアル

◆12月7日に附属図書館のWebサイトをリニューアルしました。◆よりわかりやすく使いやすいWebサイトを目指し、デザインや構成を見直しました。◆トップページの目立つ位置に検索窓を配置し、「まとめて検索」（ディスカバリー・サービス）、「図書・雑誌」（OPAC）、「電子ジャーナル」、「電子ブック」、「データベース」という5つの検索をタブで切り替えることができるようになりました。◆今後もコンテンツの充実を図っていきますので、附属図書館Webサイトをどうぞご利用ください。

グローバル・コモنزの24時間開館について【総合図】

◆総合図書館では、2013年1月21日～2月18日の期間、グローバル・コモنزの24時間開館を試行しました。◆初日から、グローバル・コモنزの席数をはるかに上回る数の学生の皆さんが訪れるほどの反響で、一時的に図書館ホールのテーブル・椅子を持ち込み約70席を増席しました。◆1、2年生を中心に、最も多い時で160名を超える学生がグローバル・コモنزで試験勉強に熱心に取り組んでいました。

グローバル・コモنزのイベント利用【総合図】

◆2012年11月のグローバル・コモنز開設以来、各種イベントに活用いただいています。本学天文同好会による「星空観測会事前レクチャー」、サイエンスルーによる「知的書評合戦ビブリオバトル」、最近では本学1回生が企画実施した交流イベント「阪大語り場SpeakOut」の予選会など、2013年2月末までに8つのイベントが開催されました。◆附属図書館はグローバル・コモنز、ラーニング・コモنزを活用し、学生・教職員の交流を促進したいと考えています。皆さんの自由な発想を広げるお手伝いをいたします。◆要件は、主催が学内の方、教職員が責任者、学内公開です。日時・人数・内容で応相談となります。学生・教職員の皆さんの交流と創造の場としてご活用ください。

TA作成のパスファインダーを設置【外国学図】

◆外国学図書館では、外国学図書館TAが作成したパスファインダー「るくぱす」を設置しました。玄関ホールおよび関連がある資料の近くに置いています。幅広いテーマが揃い、設置当初から好評です。今後も更に充実させていきますので、ぜひご活用ください。

写真展・コーシャ・フェレンツの世界「多元時空」【理工学図】

◆写真展コーシャ・フェレンツの世界「多元時空」が2012年11月28日～11月30日の3日間、理工学図書館で開催されました。この写真展は、関西ハンガリー交流協会、大阪大学外国語学部ハンガリー語学専攻ほかの主催となっており、外国語学部の学生を中心に多数の方にご来場いただきました。

無線LANアクセスポイントの増設・交換

◆各図書館の無線LANアクセスポイントが2月末から3月上旬にかけて、増設、交換されました。交換されるアクセスポイントはより安定性の高い odins-1x に対応したものとなります。これにより、ノートパソコンやタブレット端末によるインターネット利用環境が大きく改善されます。◆接続方法についての詳細は、ODINSのウェブサイトをご覧ください。

<https://nw-mng.odins.osaka-u.ac.jp/cgi-bin/cbdb/db.cgi?page=DBView&did=227>

教員著作 寄贈の紹介①

2012年11月1日～
2012年12月20日受領分

奥本泰久（接合研）
・愚者の千慮（文芸社、2012）

松行輝昌（学際C）
・地域発展の経済政策（創成社、2012）

池田光穂（CSCD）
・人と動物の人類学（春風社、2012）

宮本又郎（名誉教授）
・図説明治の企業家（河出書房新社、2012）

飯倉洋一（文）
・上田秋成（大阪大学出版会、2012）

木村重信（名誉教授）
・世界を巡る美術探検（思文閣出版、2012）

田邊欧（言文）
・待ちのぞむ魂（春秋社、2012）

松永和浩（博）
・ものづくり上方“酒”ばなし（大阪大学出版会、2012）

渡倉仁（名誉教授）
Solvent extraction and liquid membranes (CRC Press, 2008)

深尾葉子（経）
魂の脱植民地化とは何か（青灯社、2012）

東稔節治（名誉教授）
化学反応工学（AIP Press, 2012）
プロセス設計学入門（学術出版印刷、2012）

※敬称略、順不同

アンケート調査の実施結果(中間報告)

はじめに

附属図書館では、平成24年11月1日（木）から11月30日（金）までの約1か月間、Webによる図書館用のサービス品質に関する利用者アンケート調査 LibQUAL+®（ライブカル）を実施しました。これは利用者サービス向上のための図書館サービス評価と附属図書館の経営改善および事業計画策定のための基礎データ収集を目的としたものです。ここでは、その結果概要を報告します。みなさまのご協力、本当にありがとうございました。

LibQUAL+®について

LibQUAL+®は、米国研究図書館協会（ARL）が図書館用のサービス品質を測定するために、顧客サービス品質測定のSERVQUALを基に開発した調査ツールです。22項目にわたる調査項目に対し3種類（最低限、期待、実際）のサービスレベルを利用者が点数化した結果に基づき、①サービスの姿勢（AS）、②情報のコントロール（IC）、③場所としての図書館（LP）という3つの側面から図書館サービスの品質を評価するものです。大阪大学での実施は2008年より隔年で実施しており、今回で3回目となります。



あなたの

声

聞かせてください

開館時間の
延長が
実現しました！

2012年11月1日～30日
附属図書館利用者アンケート

図書館をよりよくするために—
図書館ホームページからご参加ください。
<http://www.library.osaka-u.ac.jp>
協力いただいた方には油断で粗品をプレゼント！



回答者の内訳

有効回答数は、1,096件（学部生551、大学院生376、教員151、図書館スタッフ2、職員16）でした。回答率は、調査対象者（学部、大学院生、教員の在籍数）の4.1%にとどまりました。

LibQUAL+®

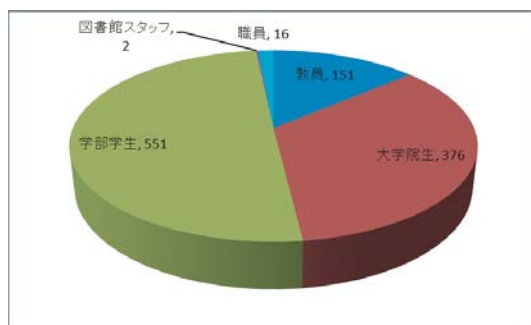
LibQUAL+は、図書館サービスの品質評価をするための調査ツールです。米国ARL（Association of Research Libraries）が開発し、これまで世界中でおよそ1,200の図書館で実施されています。

日本国内では本学以外に、慶應義塾大学、金沢大学、東北大学などで実施されました。

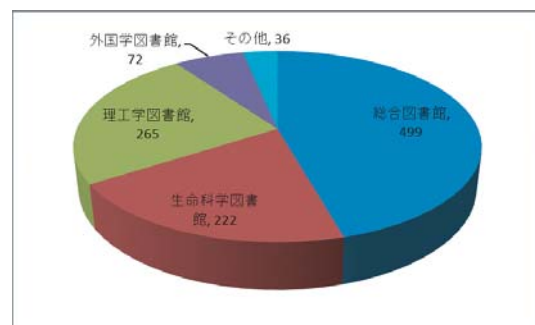
LibQUAL+の調査手法は、大きく計量的調査と質的調査の二つに分けられます。

計量的調査では、サービスの質を「望ましいレベル」と「実際のレベル」のギャップにより測定するSERVQUALの手法を図書館に適用しています。具体的には、サービスの姿勢（AS）、情報のコントロール（IC）、場としての図書館（LP）にかかわる22項目について9段階で評価してもらい、「望ましいレベル」と「実際のレベル」の差を測り、満足度を推定しようというものです。

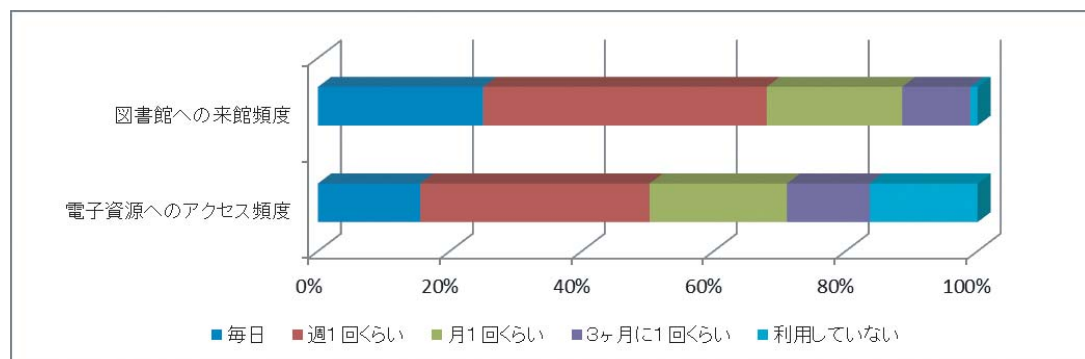
質的調査としては、回答者からコメントを採取する方法がとられています。両者の手法を合わせることで、よりバランスのとれた調査結果が得られるような工夫がなされています。



回答者数（利用者区分別）



回答者数（図書館別）



集計結果の概要

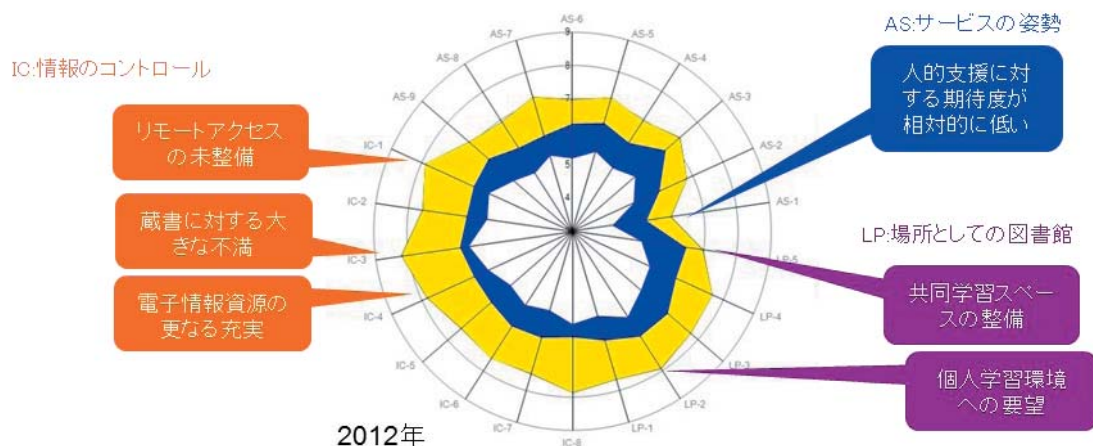
(1) 全体

「情報」(IC)、「場所」(LP)に対し「サービス」(AS)の「望ましいレベル」と「最低限のレベル」が相対的に低い数値となっています。このことは、回答者の関心が前二者に比重を置いていることを示しています。前回調査でも同様の傾向を示していましたが、今回の調査においては、「実際のレベル」の値が全般的に高くなっているところに違いがあります。

このことを言い換えれば、回答者が総体的には図書館に対し依然高いレベルの期待を維持しつつも、現状の活動に対しては肯定的な評価を示していると捉えることができます。

たとえば、「共同学習スペース」(LP-5)の整備に対する高い評価は、ラーニング・commonsの拡充(外国学図書館に「るくす」を開設)、総合図書館でのグローバルcommonsの開設に対する態度を反映したものと考えられます。

一方で、雑誌も含めた「蔵書」(IC-3、IC-8)や「電子情報資源」(IC-4)の充実、「リモートアクセス」(IC-1)の整備に対する評価は、わずかに上昇しているものの、継続した努力が必要です。また、人的支援「サービス」(AS)に対する期待度を上げることも今後の課題です。

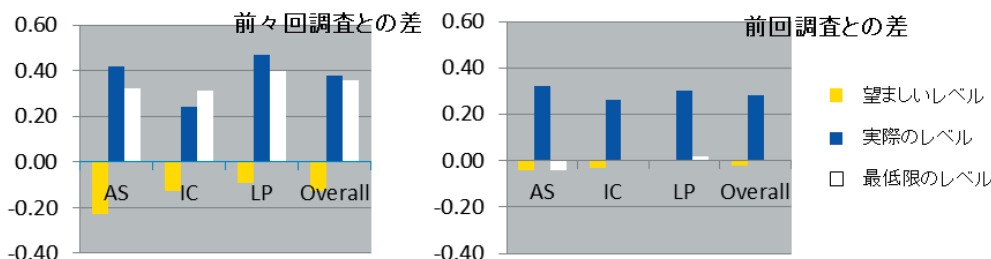
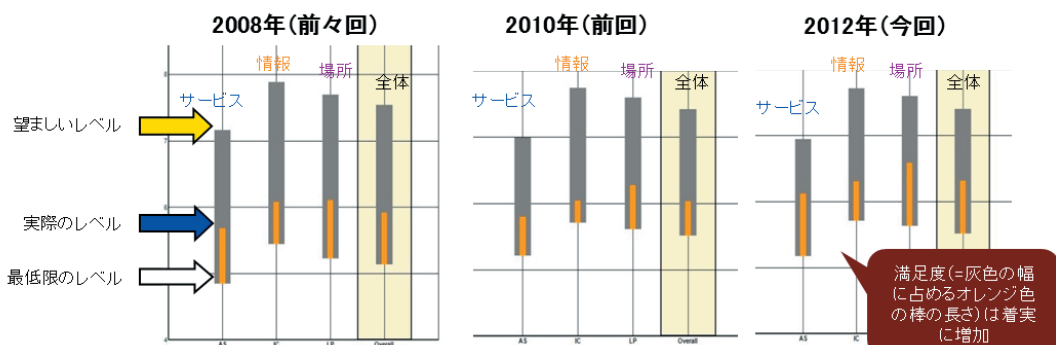


期待と実際のギャップ: 望ましいレベルと実際のレベルの差

(幅が広いほどギャップが大きい)

実際と最低限のギャップ: 許容できる最低限のレベルより実際のレベルが上回っている場合の差

実際と最低限のギャップ: 許容できる最低限のレベルより実際のレベルが下回っている場合の差



教員著作 寄贈の紹介②

2012年12月21日～
2013年2月28日受領分

澤井実(経)

・Towards a reinterpretation of Japanese economic history (財団法人国際高等研究所, 2012)

中山康雄(人)

・示される自己(春秋社, 2012)

久角喜徳(工)

・エクセルギーデザイン学の理解と応用(大阪大学出版会, 2012)

杉田米行(言文)

・Encyclopedia of World War II(ABC-CLIO, 2005)
・World War I: encyclopedia(ABC-CLIO, 2005)
・Encyclopedia of modern Asia(Gale, 2002)
・World War II in the Pacific: an encyclopedia(Garland, 2001)
・Encyclopedia of the Vietnam War(Macmillan, 1996)

阿部武司(文)

・織物からアパレルへ(大阪大学出版会, 2012)

千原秀昭(名誉教授)

・ケンケル化学の基礎(東京化学同人, 2012)

田中仁(法)

・現代中国変動と东亚新格局(社会科学文献出版社, 2012)

※敬称略、順不同

景品の贈呈

今回のアンケート調査では、協力の御礼として、ささやかな景品を用意いたしました。

1等（1名）

Amazon Kindle
Paper White 3G

2等（各1名、合計3名）

ロールペンケース

森永製菓 チュッパ
チャプス・ツリー
2012年版

うまい棒 関東発売全
16種類完全制覇セット

3等（各8名、合計16名）

図書カード（2000円分）

ワニ博士ぬいぐるみ（大）

厳正な抽選の結果、当選された20名の方には、1月中旬に個別にメールにてご連絡を差し上げ、景品を引き渡しました。

図書館職員から景品を受け取る当選者の方々



（1等 Kindle）

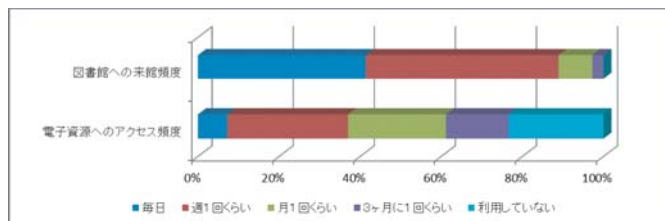
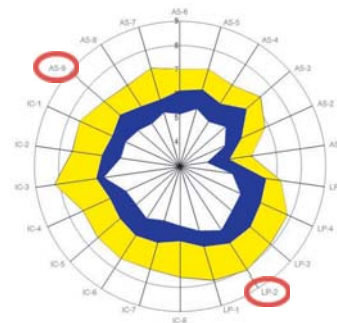


（2等 うまい棒）

（2）対象者種別毎

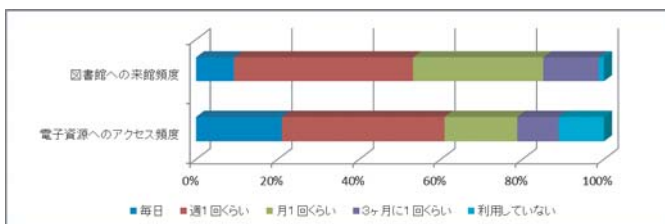
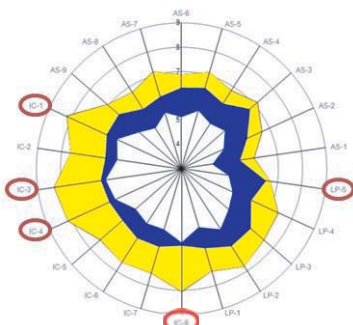
（a）学部生

「IC-3 蔵書」（8.21）、「LP-2 学習・研究環境」（8.09）に高い期待値を示しています。「サービス」「情報」「場所」いずれの領域でも、肯定的な評価を示しているのが、特徴的です。



（b）大学院生

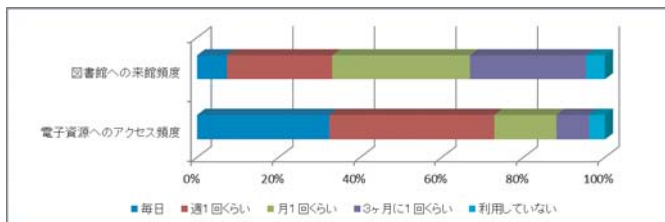
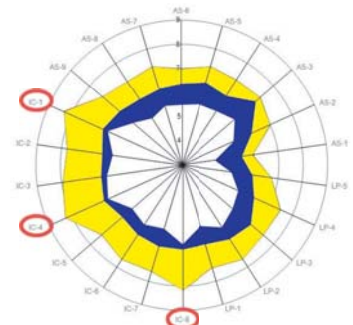
「IC-1 電子情報へのリモートアクセス」（8.20）、「IC-3 蔵書」（8.31）、「IC-4 電子情報」（8.16）、「IC-8 雑誌」（8.05）、に高い期待値を示しています。傾向としては教員と似ていますが、「共同学習スペース」（LP-5）に対して高い評価を示しているところが、異なります。



（c）教員

「IC-1 電子情報へのリモートアクセス」（8.32）、「IC-4 電子情報」（8.26）、「IC-8 雑誌」（8.17）に高い期待値を示しており、前回よりもその数値は上昇していますが、「サービス」「場所」に対する期待は相対的に低い水準にとどまっています。

このことは、電子ジャーナルを中心とした電子的情報基盤の充実を望んでおり、図書館の利用形態としては、非来館型利用が大きな比重を占めていることを示唆しています。



LibQUAL+®の設問項目

- AS-1 図書館スタッフは利用者に自信を持たせてくれる
- AS-2 図書館は利用者一人一人を大事にしている
- AS-3 図書館スタッフはいつも礼儀正しく、丁寧である
- AS-4 図書館には利用者の質問に進んで答えようとする姿勢がある
- AS-5 図書館スタッフは利用者の質問に回答できる知識を持っている
- AS-6 図書館スタッフが利用者に気配りのある対応をしている
- AS-7 図書館スタッフは利用者のニーズを理解している
- AS-8 図書館は進んで利用者に協力してくれる
- AS-9 図書館利用において利用者が困っている事について、信頼できる対処の仕方をしている
- IC-1 自宅または研究室からデータベースや電子ジャーナルなどの電子資源にアクセスできる
- IC-2 図書館のウェブサイトは、利用者が自力で情報を見つけられるように作られている
- IC-3 私の学習・研究のために必要な本や雑誌（紙）の資料が揃っている
- IC-4 私が必要とする電子情報資源（電子ジャーナルやデータベース）が揃っている
- IC-5 必要な情報に容易にアクセスできるような最新の機器・設備を備えている
- IC-6 私自身の力で必要なものが探せるような、使いやすいアクセスツールがある
- IC-7 人に頼らず簡単にアクセスできるように、情報が提供されている
- IC-8 私の研究に必要な雑誌が、印刷版または電子ジャーナルとして収集されている
- LP-1 図書館は学習・研究意欲をかきたてられるような場所である
- LP-2 ひとりで学習・研究するための、静かな空間がある
- LP-3 快適で、また行きたくなるような場所である
- LP-4 学習、研究、調査のためのとっておきの場所である
- LP-5 グループ学習や共同研究のためのスペースが整っている

コメント

寄せられたコメントのうち、最も多かったのは、今回も、「図書館資料の充実」、「開館時間の延長」、「適切な空調温度」でした。

附属図書館では前回の調査で寄せられたご意見に応え、開館時間の延長や、24時間開館の試行を実施してきました。

今後ともご要望にできるだけ応じられるよう多くの課題に対して改善に努めていきたいと考えています。

図書館サービスの向上に向けて

今回のアンケート調査の結果から、附属図書館では、利用者の求めに応じた目指すべき重点目標（アクションプラン）を設定し、組織的・継続的なサービスの改善に努めていきます。また、利用者アンケート調査は今後も定期的（隔年）で実施を予定しており、図書館が担うべき役割、利用者のニーズ、図書館サービスの質とのギャップを縮めるべく、努力を重ねていきます。

なお、アンケート調査の結果報告書については、後日、附属図書館Webサイトで公開する予定です。<http://www.library.osaka-u.ac.jp/enquete.php>

NEWS☆図書館からのお知らせ(承前)

各館図書展示

- ◆iPS細胞、ES細胞、再生医療[総合図] 2012.10
- ◆Scienthrough ×図書館「ブックカフェ@まちかね祭」後継企画[総合図] 2012.11~2013.2
- ◆第31回「14冊の本棚」：2012年をふり返る14冊[外国学] 2012.12
- ◆図書展示「Merry Christmas and a Happy New Year」[理工学] 2012.12
- ◆TA Recommended Books[外国学] 2012.12~
- ◆第32回「14冊の本棚」：『暦』に関する14冊[外国学] 2013.1~2
- ◆図書展示「恋する文庫」[理工学] 2013.2



■大阪大学機関リポジトリ

OUKA は大阪大学の教育研究活動から生み出される論文などの学術成果を電子的に保管・公開する大阪大学の事業です。

■インターネットを通じて世界中の誰もが、いつでも大阪大学の学術成果を自由に無料で見られるようにすること（オープンアクセス）を目的に構築されています。

■現在、OUKA では学術雑誌論文、紀要論文、博士論文、会議発表資料、研究報告書など大阪大学の教職員ならびに大学院生の学術成果を掲載しています。



OUKA イメージキャラクター「OUKAちゃん」

■このOUKAをより多くの方に知ってもらおう！と、このたび宣伝用グッズとしてOUKAちゃんトートバッグを作りました。

■学術成果のOUKA登録に興味がある、すぐにでも登録したい！と思ったらすぐにご連絡ください。担当者が研究室までご説明に参ります。

■研究室訪問時にもれなくOUKAちゃんトートバッグをプレゼントいたします♪

■いつでもご連絡をお待ちしております。

附属図書館学術情報整備室
学術情報組織化班電子コンテンツ担当
☎ 06-6850-5071
✉ ouka@library.osaka-u.ac.jp



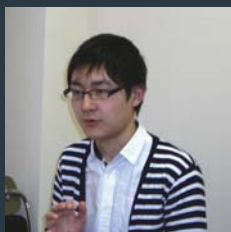
トートバッグを手にする東島館長



平野雄大さん (工2)



曽根千智さん (人科2)



山口裕生さん (法1)

インタビュー中は皆さんの意気込みがピシピシ伝わりました。新たな気づき、そして、自分たちらしさとニーズとのバランスの難しさといったショセキカの本質をお伺いして、私たちも3名の方の姿勢に強く共感しました。本という同じ媒体を扱う者同士、厳しい壁にぶつかりながらも果敢にチャレンジする彼らを図書館は応援していきます。(小松)



速報! ついに出版決定!
勝ち残った企画
はコレ!



ドーナツを穴だけ残して食べる方法 ～大阪大学ドーナツ論義

「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」って? 一度考え出したら、答えが出るまでスッキリしない!! そんな不思議なこの問いを、阪大の先生が本気で考えます。心理、物理、哲学…面白い解答もりだくさん!! 読み終わった頃、あなたはちょっと賢くなっているかもしれません(笑)

本をつくる ー「ショセキカ」プロジェクト

『本をつくるー「ショセキカ」プロジェクト』は、大阪大学出版会の協力のもと、書籍づくりを学生が企画提案し、広報・販売まで全面的に関わるプロジェクト。試行期間を経て、2012年10月より授業としても開講されました。同会による出版委員会で企画が採用されれば、出版に向けて動き始めます。メンバーは授業終了後も精力的に活動中。そんな熱いメンバーの中から、3名の方にお話を伺いました。

参加のきっかけ

曽根 出版業界とか、本を作るという過程に興味がありました。実際にやってみるという授業も他にはなかったのでとても魅力を感じました。

平野 ショセキカはFacebookで知りました。せっかく大学に入ったので、講義を受けるだけではなく、自分たちで作出すとか、ディスカッションするとか、出版までの過程を楽しめそうだと思い、参加を決めました。

山口 シラバスで見つけて、今までずっと読んできた本がどういうプロセスを経てできあがるのかに興味をそそられました。

参加して得たこと

曽根 書店に行ったとき、今までは消費者目線でしたけど、売れる本とは何か、どういう売り方をしているのかという目線で見て自分気づきました。世界が広がったなと思いました。

山口 企画書をイチから作っていく過程を経て新たな視点を得ることができました。書店で「面白い本」というタイトルの本を見つけたときは、このタイトルってすごいなと思いました。ものすごく自信がないとできないですからね。

平野 コンペでの発表の際、書店の方に「企画いいね」とか、「着眼点がいいね」と言ってもらったときはうれしかったです。先生の執筆許可を得るのはとても大変でしたけど、直に会話をして教授や准教授がどういうことをしているのかを知ったり、普段では見られない一面を見ることができたりして、新しい発見の連続でした。

企画を進める難しさ

平野 書籍化実現への関門である出版委員会に、学内コンペを勝ち進んだ2企画で挑んだのですが、残念ながら出版決定には至

りませんでした。企画の趣旨そのものへの疑問や、出版して採算が取れるのか、具体的なプランが欠けているという厳しい意見をたくさんいただきました。

曽根 そもそも企画の趣旨として、メンバー内では学生の目からみて面白いと思う本を追及してきました。しかし委員会では、大学の出版物としてある程度のクオリティ、固さは絶対必要だろうという意見があがり、意識の乖離が見られました。ただやはり、学生が出版する本なのだから、意見は何うとしても、企画の趣旨、これが面白いよっていう軸はぶらさないようにという方向で練り直しを考えています。出版業界の第一線で活躍するディレクターの方にもお話を伺いましたが、社会のニーズとこちらの作りたいものとの間に乖離があるとき、どうバランスを取っていくか、この点が本を作ることそのものだとおっしゃるのですね。だから、私たちは今まさにその醍醐味を味わっているんだなと思います。

今後の活動予定

曽根 出版が決まったら、書店での販促イベントをしたいです。企画立案やイベントでの司会進行など、メンバーもどんどん外に出てやっていこうと考えています。図書館ではラーニング・コモンズがグローバル・コモンズを会場にして、阪大生に周知するイベントができればいいですね。

山口 同時進行で、今春、新入生向けオリエンテーションでの本の展示イベントも企画しています。おすすめ本の紹介を通して、ショセキカプロジェクトの楽しさを広くPRしていきたいです。

取材：学術情報整備室 小松涼子
利用支援課 久保山健

VOL.46 NO.3 通巻182号

2013年3月31日 発行

編集：大阪大学附属図書館

担当：赤井規晃、高野恵子、久保山健、小松涼子、
藤江雄太郎、渋谷あずさ、岸本まどか

住所：大阪府豊中市待兼山町1-4

WEB: <http://www.library.osaka-u.ac.jp>

E-mail: kohowg@library.osaka-u.ac.jp

twitter: @OsakaUnivLib